

水稻の少肥栽培向け多収系統「滋系61号」の育成

野田 秀樹・寺本 薫・小原 安雄・吉澤 清・
谷口 真一・渡辺 健三・豊岡 幸二**・宇野 弘子**

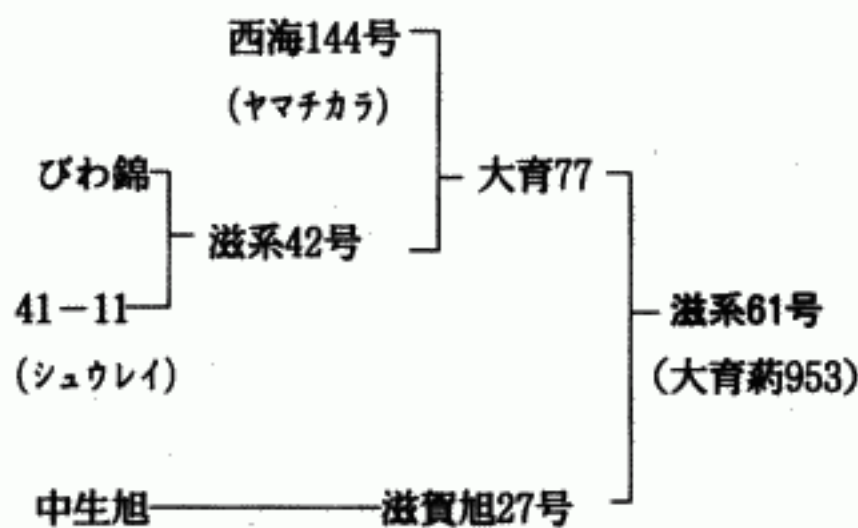
近年、環境保全に対する意識の高揚から、環境と調和した農業が叫ばれている。とりわけ、琵琶湖を抱える本県では、農業排水の環境負荷軽減の観点から農薬や化学肥料を極力抑えた環境調和型稲作の推進が重要な課題である。こうした時代の要請の中、少肥料栽培においても高い収量性が期待できる「滋系61号」を育成した。

1. 来歴

「滋系61号」は、1987年に草姿が良く多収の「大育77」を母、旭からの良食味性を引き継ぐ「滋賀旭27号」を父として人工交配を行い育成した系統である。1988年にはほ場で雑種第一代(F₁)を養成し、翌1989年にはほ場に展開した雑種第二代(F₂)の個体から出穂直前の穂を採取し薬培養法によって遺伝子の固定を図った。1990年に再分化個体の中から稔実した種子を播種・育苗後、ほ場に移植し個体選抜を実施、以降系統育種法に従って選抜・固定を繰り返してきた。1992年に「大育葯953」の収量試験番号を付して生産力検定試験および特性検定試験、翌1993年からは奨励品種決定調査に供試して特性の把握を行ってきた。また1994年からは、これと並行して少肥料および無肥料栽培条件下における収量性等の特性を調査してきた。

1995年度の世代は、F₂A₇（薬培養後第7世代）に当たる。

系譜図



2. 特性概要

出穂期および成熟期は、「日本晴」よりやや早い中生の梗種である。稈長は「日本晴」に比べやや長く、穂長は同程度、穂数はやや少ない偏穂重型の草型を示す。耐倒伏性は「日本晴」と同程度。収量性は「日本晴」に比べ明らかに高く、少肥条件下でこの差は特に顕著である。玄米の外観品質は、「日本晴」に比べやや劣る。また、玄米の千粒重は「日本晴」と同程度である。いもち病には、「日本晴」よりやや弱い。また、穂発芽性については「日本晴」よりわずかに優り、中から中難である。食味は標肥栽培では「日本晴」よりやや劣るが、少肥栽培では「日本晴」と同等からやや優る。

表 「滋系61号」の特性

品種または系統名	滋系61号	比) 日本晴	参) ころづくし
熟 期	中生の晩	中生の晩	中生の早
草 型	偏穂重型	中間型	中間型
出穂期(月・日)	8.13	8.15	8.9
成熟期(月・日)	9.19	9.21	9.14
稈 長 (cm)	81	78	73
穂 長 (cm)	20.8	21.0	21.5
穂数(本/m ²)	338	336	339
耐倒伏性	やや強	やや強	極強
耐 病 性	葉いもち	やや弱	中
	穂いもち	やや弱	中
	紋 枯 れ	中	中
穂発芽性	中～中難	中	中
玄米重(kg/a)	66.5	59.3	56.5
同上比率 (%)	112	100	95
玄米千粒重(g)	22.2	22.3	23.7
玄 米 品 質	4.5	4.0	6.0
食 味	上の中	上の中	上の中
調 査 場 所	滋賀農試栽培部(育成地)		
調 査 年 次	1994年～1995年		

注) 窒素施用量は、基肥0.2kg/a + 穂肥0.3kg/a